

第五章 建学の精神

大學之道
在明明德



昭和己酉孟春

荒木俊馬



1 心の原風景

建学の精神

『いかなる国家社会においても、大学は最高の研究・教育の機関である。大学の使命は、将来の社会を担って立つ人材の育成にある。その教育の目標は、高い人格をもち、人倫の道をふみはずすことなく、社会的義務を立派に果たし得る人をつくることであり、しかもその職域が国内であろうと海外であろうと、その如何を問わず、全世界の人々から尊敬される日本人として、全人類の平和と幸福のために寄与する精神をもった人間を育成することである。このような人間は、日本古来の美しい道徳的伝統を精神的基盤とし、東西両洋の豊かな文化教養を身につけ、絶えず変動する国内情勢に関して十分な知識をもち、その科学的分析によって正しい情勢判断のできる能力を備え、如何なる時局に当面しても、常に独自の見解を堅持し自己の信念を貫き得る人間である。かかる学生の育成が、本学の建学の精神である』。

日本の未来への眼差し

昭和43(1968)年の京都産業大学要覧のなかで法学部長の大石義雄は「建学の精神」について、次のように解説を試みた。「(いま)大学は政治的闘争の場に化している。学問不在の大学になり下がっている。教師に学生を教育する信念がなく、かえって学生に迎合する気の弱さである。その学生もひとにぎりのハネあがり学生にひきずりまわされ

ている。本学の建学の精神は、大学を本来の姿にかえすことである』。

未来学者、物理学者で、本学草創期の学事顧問であり、たびたび来学し講演して学生に感銘を与えたハーマン・カーン博士によれば、昔も今も、日本だけでなく多くの国で、学生は社会を変革したいという気持ちを持ち、病んだ社会の病巣を突き止めようとし、あるときは社会を良くするために立ち上がった、という。「宗教上のタブーとか習慣とか、あるいは宗教上の倫理といったように、人間が人間に対して課してきたいくつもの規範、抑制力(テコ、ともいえよう)が今日、驚くべき早さで失われつつある。宗教、またその社会が持つ固有の伝統、名誉といわれるような価値、自分の仕事に対する熱心さ、こういった人間の行動の基盤になっていたものが、次第に失われつつある』。カーン博士は、日本における大学紛争が日米安保問題という日米両国だけの要因をはらんでいるとしながらも世界的な『価値の転換点』において発生したものだという認識を示した。

博士の見解によると、そのころの日本は大学の変革期を迎えていた。高度経済成長を背景にして社会の産業化がピッチを速めた。国民の国家に対する忠誠心、献身の気持ちは、次第に産業に対する忠誠心、献身に変容して行く。国民が産業へ傾斜して行き、日本の大学は産業のもとめる知識や生活スタイルについての教育を充実させるようになり、かつての人生観、価値観、世界観が揺らい



本学の学事顧問に就いたハーマン・カーン博士(左)は、21世紀は日本の時代だ、と学生たちに話しかけた。右は荒木先生

で行った。日本の国が大切に持ち続けて来た「美しい歴史的传统を基盤にした心」は消えようとしていた。そうした社会の変化を悲痛な目でみた人たちが少なくなかった。大石教授の指摘したように荒木先生が建学を思い立った背景に、当時の教育現場の混乱と、その行方に国家滅亡の危機を感じた先生の熱く激しい思いがあった。

『大学がいまのままであれば、日本は滅びる。その憂国の至情の中から本学が生まれた。そうでなければ、嘗利観念抜きで苦心惨憺、白紙から新しい大学をつくらうとするわけがない。山の上に本館が一棟、ポツンと建っているだけの大学に、なぜ多くの志願者がやって来たのか。その問いにこたえるのはただひとつ「建学の精神」に賛同した保護者が、安心して子弟を託せると信じたからである』。先生は開学のころを振り返ってしばしば、学生に話しかけたのであった。

歴史と伝統の美しい道徳

先生の心の原風景をみつめよう。『世の母親というものは、毎日の食事をつくり、子らの着物を織り、仕立て、縫ってくれる人なのだ』。

濟々畳の中学生だった先生の、母についての思い出である。庭の桜の花が散っている。春の陽を受けた縁側で母が、自ら染めた原色の糸から、反物を織って行く光景がある。やがて俊馬先生の着物になり、弟の千里から亨へおさがりになり、さらに色あせれば寝間着になる。そのころ先生がついていた座ブトンは、母が嫁入りするときに、母の母がわが娘の幸せを願いながらつむいだ晴れ

着で、つくられている。わが家の品々には、どれも父母と、その父母、あるいはもっと前の祖先からの心が伝わっている。いま自分が生きていて、中学に学び、熊本の街中を闊歩し、まばゆい未来を夢みている幸せは、自分だけの力で得られたものではない。中学生でありながら、家長としての役割を果たしつつ、先生は、いつもそう考え続けたのである。

他の光景は大正14年3月20日朝である。長男雄豪の誕生を待って京都大学病院の冷たい廊下で夜を明かして未明に帰宅していた先生は、赤い目をこすりながらモーニングを取り出して着用し、産室にとって返した。わが子と、初めて対面する。それは人生において最も厳粛な行事であると考えたからであった。

昭和4年から6年にかけてのベルリン留学時代、家が手狭になったから増築したいという妻京子の便りを受け取った。不況だからといってみんなが金を遣わないようにしたら、世の中はさびれてしまう。金回りのよくない時代であれば、おカネの値打ちはふだんより増しているのだから、ぜひ思い切って盛大に増築しなさい、費用を惜しんではいけないよ。そう回答した先生のところへ、京子から次々に報告が入る。同居している先生の母記寿が増築予定の部屋の向きが不吉だと言っている。こんな世相だからおカネを遣わない方が得策だ、辛抱すればいまの間取りで暮らしていけるのではないか、とあれこれと異論を唱えて来て困る。そういうグチである。

先生の返事は、いつの場合も明快であった。

ハーマン・カーン博士の講演
に学生、教職員が真剣に聴き
入った



『お母さんがおっしゃる通りにしなさい』『方位など私は気にしないが、母上の意見に従いなさい』親を敬い、従うこと。母からいただいた恩愛を思えば、増築に対する異論の是非を論議するまでもない。母の思いのまま、母がいまのままの住まいを希望するのであれば、そうしたら良いではないか。母の言い分に対する反論など思い浮かばないのである。

『人倫の道をふみはずすことのない』『日本古来の美しい道徳的伝統』をもった人材を育てよう、という「建学の精神」の向こうに、これらの光景のなかにいる先生の心象風景が浮かんでくる。

もうひとつ、先生の心をのぞく文章を取り上げよう(『狐狸窟瓢論』第四部「日本精神と神話」)、『人間のこころとは何か。心は意識としてあらわれる。人間の心は、深い深い奥底まで積み重なっていて、その殆ど全部は常に無意識の中に潜んでいる。人間の心は底知れぬ深淵の水全体、意識はその表面である。人間は時々内外環境に対処して色々な精神活動をなすのであるが、それは恰も風が吹き、熱を受け、光に照らされて、あるいは波が立ち、あるいは蒸気が立ち昇り、あるいはキラキラと光り輝く水の表面現象の如きもので、人間の心の全体は表面下の深淵にもたとうべきもの。人間の精神というものは、人間が生まれて以来受けた、あらゆる体験が段々と集積して出来ると先生はいう。

「日本古来の道徳的伝統」という表現に、先生の心の原風景を重ねてみると『美しい』という修飾語を書き加えた理由がほのかに見えてくる。

祖国愛

建学の精神について先生が説明するとき「祖国愛」「民族として」という言葉をしばしば使っている。これらの言葉について、危うさのつきまとうことは、先生は承知していた。国家や民族の命運に対する素朴な責任感とか、ふるさとの山河、家族の絆、文化や歴史をいとおしむ感情が、利用された苦い体験を持つ世代に属する先生であった。それに、やがて世界は地球規模の大きな枠組みにおさまって行くであろうと予言するトインビー博士からしばしば意見を聴く機会もあった。先生の言葉遣いは建学前後の頃に比べると、総長生活が永くなるにつれて随分と変化して行ったことは、注目されなくてはなるまい。

『いまや、地球上の全人類が一つの共同体である。それゆえ、大学教育としては、日本古来の伝統をバックボーンとする真の日本人を育てなくて

はならない。しかし、戦前の偏狭な独尊、排他的な国粹主義者でない国際人としての指導的日本青年を育成する』という前書きをつけて、本学の建学の精神に言及するに至る。

『大学教育としては、物質、精神両文化の調和した完全な文化国家として祖国日本を発展せしめ、世界全民族に範を垂れ、世界の平和と人類の幸福に貢献できる新世代の真の日本人を育成しようとしている』先生の考えによれば、日本という国を愛せないようでは、世界の人から尊敬されるはずがないのである。『70年代から21世紀にかけての祖国日本の運命を担い、日本民族の国際的使命を強く意識して日本民族のみならず全人類の平和と繁栄に寄与することを心がけて欲しい。そして如何なる社会に出ても誰からも尊敬せられる人間となってもらいたい』(『京都産業大学同窓会報』創刊号 昭45.10.20)

先生は、量子力学の創始者であるヴェルナー・ハイゼンベルク(1901 - 1976)を例にとり、祖国愛についての挿話を語っている。第二次世界大戦中にはドイツの原子エネルギー利用計画に携わったノーベル賞学者である。第二次大戦でドイツは敗れた。ハイゼンベルクはアメリカへ帰化しないか、という誘いを受けた。好条件が示された。しかし、好意を感謝しながらも、彼はドイツを離れなかった。ハイゼンベルクは言った。

みじめな敗戦によって焦土になった祖国ドイツ。思想的にも物質的にも国民のすべてが、收拾のつかない大混乱のなかにある。量子力学の研究者を受け入れる余裕もないようである。

しかし、私(ハイゼンベルク)はこの国土に生を受け、この国土に育てられて一人前になった。私は神から与えられた運命によって、このドイツの国土にしっかりと結ばれている。あくまでもドイツのために尽くすべき人間としての責い義務を忘れることはできない。たとえ、祖国が容れてくれなくても、あるいはまたどのような条件を示されたとしても、このドイツを去ることなど、できない、と。(『狐狸窟瓢論』第三部「科学と科学者と祖国」から)

先生による「建学の精神」は『全世界の人々から尊敬される日本人として』と、育成すべき人材のあるべき姿を枠決めしている。先生は建学のころ、祖国日本の将来に不安と危機感を抱いていた。先生は、「日本の知識人のなかに自国を罵り、自国蔑視の風潮や自国敵視の風潮をおおる人たち、あるいは教育の秩序を破壊し学園に暴力を導入する

教育者たちを嘆く『同窓会報』第14号、小西保教授「総長先生の逝去と産大の使命」から抜粋)いていたのであった。

母国日本の現状をハイゼンベルクの言動に比べてみたとき、先生の嘆きは深かったであろうことは想像にかたくない。

『祖国愛こそは最も純真な、そして最も具体的な人類愛である』と考えていた先生はまた、わが大学で育成しようとした「独創的科学家」像を描いている。

『如何なる国家、如何なる民族に於ても、科学はやはり同一の科学である。然しその万国共通の科学をば我が日本に於て如何にして振興するかとか、又特に日本国土の改良や日本民族の生活向上に如何に応用するかといった問題になると、これは必ずしも欧米先進国の物真似ではいけない。日本にはやはり日本の国土と民族に最も適切な独特の方策を建つ可きである』

『科学に国境はないとしても、科学者には祖国がある、とはルイ・パストゥールの言葉である。愛国心は最も崇高な美德の一つである。戦後は愛

国心といえば軍国主義だと考えたものすらいる。そういう人の常識を疑う。善悪是非の問題ではなく現実に戦争は起きている、一度戦争が始まった以上は勝たねばならぬ。おのれを生んだ国、おのれの住む国を愛し、国を挙げて戦う危急存亡のときに、その勝利をねがい努力するのは神聖な義務である。勝っても敗けても平和になれば、愛国心は形を変えて現われねばならぬ。愛国心は戦時中だけに必要なのではない。敗れたあとの日本にこそ愛国心はいよいよ強く祖国再建のために発揮されなくてはならぬ』『祖国愛は戦時にも平和時にも変わりあるべきではない。科学には国境なく、科学者は人類の福祉のために科学を研究すべきである。同時にまたパストゥールが言う如く、科学者には祖国がある。然らば科学者の祖国愛は人類愛と矛盾するものであろうか？ 決して然らず！ 否、むしろ完全に一致するものだとは私は信ずる。世界人類というものはただ抽象概念として思惟せられ得るだけであって現実には存在しない。実在する個々の人類は何処かに国籍を有する人間である』(『狐狸窟瓢論』同上)



本学で記者会見するトインビー博士、ペロニカ夫人と荒木先生(右端)

2 教育者像

理想の教育

先生は、建学ののち創設当初からの教職員に対して『卒業生の良否がわが大学の将来を決める』と言い続けた。樹の良否は果実をもって知るべし、という教育についての考え方である。大学の経営は4年間、学生たちに教育の場を提供して社会に送り出して、そこで終わりになるものではない。卒業生の成長を見守り、その人たちへの評価があって初めて「京都産大の教育」が評価される。教育は人生のすべてを引き受ける、息の永い責任をもつのだ、という考えであった。

先生は、卒業生の結婚式によく招かれている。『大津市のホテルの結婚披露宴へ出席。花婿は第一回入学後、同志社へ転学。花嫁は3月卒業見込みの一期生』(昭44.2.16)。一期生についてはよほど思いが深いのであろうか。他大学へ転学して行った学生の結婚式にも喜んで出席したのである。『第一回卒業生で三菱商事就職のA君と東京駅で逢う。地下街「けやき」でいっぱい飲んで、前途を励まして別れる』(昭46.6.9)のような記述が昭和44年春以降の日記にときおり記されている。

小学校時代の恩師についての思い出話がある。当時の小・中学校の教師は大学や高等学校、実業専門学校などの教授・助教授とは比較にならない薄給で、詰め襟の洋服に腰弁で通勤するといった質素な生活であった。だが、名利を意とせず、教

育を天職と自認して青少年の人間形成に専念することのなかに人世の楽しみを味わうといった、そういう教師が多かった。中学の教諭にも随分こわい厳しい人がいた。国語・漢文や修身、体操など、最も嫌いな、従って成績も頗る悪かった学科の担任で、その当時は「こん畜生」と言いたいほどの教師であったが、卒業後だんだん時が経つにつれて、そういう教師が一番なつかしくなる、と先生は言っている。

『それというのも、単に学科の知識を詰め込むだけではなく、厳しい中にも真に親切的な教育者としての人格が知らず知らずの間に私の心の中に融け込んで私の人間形成に大きな感化を与えていたからだと思う。だから休暇や墓参などで帰省する毎に一番に訪ねて行くのは中学時代のそういった先生や小・中学校の校長さんや担任の訓導などで、「お陰で大学を卒業しました」、「助教授になりました」、「学位を取りました」等々と報告すると、それを又わが事のように喜んで、「まあゆっくりせい、一杯やろう」などといった事にもなる。こうした喜びは、私自身がその後、教育に従事して始めて体験した事である』

『教育の効果は2、30年経たねば現われて来ないだけに、教育というものが如何に楽しい仕事であるかを、つくづく痛感する』

先生の教育観の深層を形成しているエピソードといえるかも知れない。

先生の理想の教師像は、ここに述べられている



荒木先生の言葉を聴く学生服の学生で黒一色の入学式。現在のカラフルな会場と対照的だった。昭和41年度入学式、旧体育館で

ように濟々齋時代の恩師である。先生が在籍したとき、創始者の佐々友房はすでに政治家に転身したあと亡くなっていたが、齋内に佐々の居室が大切に保存されていた。六畳の部屋に机が一脚、横に書物箱がふたつかみつつ。ここで佐々は書物を読み、手紙をしたため、名筆家であったから依頼に応じて揮毫し、生徒と親しく話した。佐々が来るようにと招いた生徒があり、自ら押しかけた生徒もいて、深夜に至るまで来客の姿の途切れることはなかった。病気で伏せていても、生徒が来ると、頭に氷嚢^{ひょうのつ}をのせて談話したという。生徒の佐々に心服することは大変なもので、佐々が外出先から帰齋すると、誰かが「齋長先生のお帰り」と叫ぶ。たちまち齋門に生徒が整列して出迎えるなかを、佐々は顔をほころばせて校舎に入ったという。その校風は歴代の齋長に引き継がれて行った。

教育は感化である

京都産大の古い卒業生の思い出に残る俊馬先生もまた、学生と親しく交わった。学生の有志が学内外の問題を抱えて総長室を訪問すると、先生は断ることがなかった。所用のときは、秘書に連絡先を確認して後日、対応した。「学園紛争のころ、騒ぎを起こそうという連中もいたが、そういう学生であることを承知のうえで先生は話し倦むことがなかった（卒業生の話）」という。

濟々齋の佐々はつねづね「教育八事務ニアラス感化ナリ」と語り、師弟間の愛情と信頼こそが教

育の大本であり師弟の触れ合いがすなわち教育であると考えていた。佐々はまた「教育は情七、義理三」の信念に立ち、生徒と親しく接して長所短所を見極めて、その適性に合った指導を心がけた。とくに生徒に長所を自覚させ、意欲を引き出す道に長けて、卒業後も指導を絶やすことがなかったという。俊馬先生の総長像は、佐々の面影を濃くとどめている。

教員の欠勤・休講には厳しかった。学会や海外への出張のときには代講を立てるか補講を原則にした。開学直後、教員陣は手薄であった。休講がある。先生の出番であった。数学、物理学、ドイツ語、中国語の代講を引き受けた。平成13年現在の学長、新田政則は開学時から教鞭を取ってきた経済学者であるが、開学直後は教養部でドイツ語の担当になった。学術論文を易々と読みこなす新田があるとき、数日間の代講を俊馬先生にお願いして出張した。帰って来て元通りに授業再開。すると、学生のひとりが立って「総長先生の発音と全然違う」と注意してくれた。総長がベルリン滞在2年余のドイツ語通であることを知っていた新田は冷や汗を流す思いで、改めて発音の勉強をやり直したという。総長の代講を聴いた古い卒業生のひとは『講義は休まない。勉強する環境は確保する』『だから懸命に学べ』という総長先生の無言のサインだと感じ取って受講態度が自ずと真剣になったものです、と述懐している。

3 学ぶ心

学ばねば去れ

『他の大学はいざ知らず、本学に於ては、勉強するかしないかの自由を諸君の権利として充分に認めると同時に、卒業させるか落第させるかは本学の権限であって、規定の学科単位を修得出来なければ留年せねばなりません（第2回入学式）』

先生は入学式で繰り返した。『新しい学生諸君に入学を許可した。しかし4年後には、必ず卒業させるとは約束いたしません』。淡々とした口調であった。聴き入る新入生、保護者は肅然とした。感激した。「これこそが、大学生を預かる大学の本当の姿である」

先生にとって、大学は学生にとって勉強する所であった。大学は国の最高の教育研究機関であり、高校までの教育とは本質的に違う。学生自身が自

ら考え、自らもとめるという修学態度が最も大切である。それが先生の考えであった。3月に卒業できない学生、入学したあと落伍し学外へ去った学生、は少なくなかった。

また、入学は易しいが卒業の難しい大学。開学時のそういう評価は、すぐ変わった。受験者数が昭和47年17,819人、48年20,409人、49年25,634人、50年40,909人。定員増を考慮に入れても、入学も卒業も難しい大学へ変容して行った。『4年間で卒業させるとは約束しない』先生は、単位不足に対して妥協はしなかった。

大学というところは、知識のデパートメントストアではない。教師と学生が精神において共感しながら人格の向上をめざす人間形成の道場なのである。真理探究の協同研究体でもある。学生は、教師のもとに出掛けて学術上の質問、あるいは人

生の悩みを聞いてもらいなさい。教師の体験談を聴いたらよいであろう。老大家の人生観を拝聴することによって、学生諸君の人格は自ずと高い水準に引き上げられるであろう。大学は人間を磨く研修道場である。先生はこう言って、学生たちに4年間、充実した生活を送るように励ました。時間を惜しめ、とも論じた。

『人の一生というものは、諸君のような青少年には随分と長いように思われるでしょうけれども、本当は非常に短い。1時間、過ぎ去ってしまえば、取りかえしのつかない人生の貴重な時間の浪費であります』(昭和47年)

教師に対して、学生に向かって、大学としての姿勢を示し、それぞれの本分を守るように言い続けた先生は、自らに対しても厳しかった。『勉強せねば卒業はできない』と言ったあとで『毎日出席し、真面目に学習する学生であれば、必ず全課程を修得出来る』と付け加えたのであった。真面目に学ぶ心を受け止めるために、教育と研究の施設を拡充する。教育による学習指導をいっそう強めて行く。厚生施設をととのえ、職員をそろえる。『(真面目に学習する学生が)必ず卒業できるよう、教育補導に遺漏なき事を期しております。それが諸君を受け容れた以上、本学の義務だと考えているからであります』と、自らの責務を明らかにしたのであった。

人づくり

『教養課程には、人文科学系、社会科学系、自然科学系の諸学科が設けてありますから、諸君は教養部の2年間に時間の許す限り多くの科目を聴

講する事を奨めます。聴いた事を総て覚えて置けというのではなければ、試験の点数を問題にする必要もない。勤勉に出席して権威ある先生方の警咳に接する事で、其の影響が諸君の心理の奥底に刻み込まれ、聞いた知識の内容は忘れて仕舞っても、其が潜在意識となって、広い多角的な観察力、理解力、推理力、判断力として働き、専門課程に進んでからの研究に大きな助けとなるのみならず、諸君が将来、実社会に出て仕事をする場合にも、創意、工夫、企画、決意、実行の原動力として現われるのであります。是が大学に教養部の置かれた所以です』(第2回入学式 昭41.4.15)

教育日本新聞のもとめに応じて「現代の家庭と教育」をテーマにして、荒木先生は女優の清川虹子さんと開学間もない昭和42(1967)年、対談している。

そのなかで先生は、戦前の教育制度について、すべて戦前の方が良かったという懐かしがる傾向があることに反論して、戦後の教育を受けている学生たちの方が伸び伸びとして、なかなか良いという評価を加えている。

教育についていえば、学校で学んだことが社会に出てそのまま役に立つというようなことは無い。社会も学問もどんどん進み変化するものだから、暗記しても役に立たないことは当たり前である。だから京都産業大学の教員陣に言っているのは、成績を良くしようと努めなさんな、ということ。大学の成績というのは、先生の教えたことをしっかり覚えていたら良いのだから、成績の良いことは物覚えの良さの物差しにはなるが、立派な人になってくれるとか、創造的な研究をなし遂げるとかいうこととは関係がない。先生はそう指摘したうえで、大学教育の目的について次のように語っているのが興味深い。

『教育は、人間をつくるものだ。根性をつくる。学問するのも、生産するのも、政治をするのも、要は人間である。だから、考える力のある人間を育てなくてはならない。それも、立派な日本人の心をもった人間』。

清川虹子さんが「先生の思いを実現した理想の大学で、もういっぺん学び直したい、と思うひが多いでしょうね」とエールを送っている。

荒木先生は、開学にあたって『考える力をもった人材』づくりの拠点として位置づけたのが「教養部」であった。教養課程の2年間において、将来どのような分野に進もうとするのか、に関係なく、みんなが人文科学、社会科学、自然科学の三つの



開学間もない頃の教科書。荒木先生の『宇宙構造観』、大石教授の『憲法概論』などの書名がみえる

領域をまんべんなく学ぶ。そこで得られた幅広い底力が、専門課程での深い理解を助け、創造的な研究成果をあげることに繋がる。戦後の大学教育で重視されていた教養部に対して、荒木先生は開学直後から全面的に賛意を表わした。そして教養部の単位を取得し切れなければ、留年させて、専門課程への進級を認めない教育システムを堅持していた。

しかしやがて、教養課程のカリキュラムと授業内容に対して、高校教育と重複する部分が多すぎること、専門的な研究をめざしていたのに、教養2年間でそうした意欲の芽がしぼんでしまう恐れを孕んでいること、知識の詰め込みの傾向を強めて、本来の「考える力」の育成という目的とはかけ離れてしまっていること、など教養教育の空洞化への批判が強まった。

さらに高度経済成長の真っ只中の昭和41年、中央教育審議会の答申が「期待される人間像」を打ち出し、そこでは、工業社会、経済社会の振興に役立つ人材の育成が望まれた。大学も経済発展の仕組みに取り込まれるようになった。専門課程の2年間では、すぐに役立つ人材づくりには時間が足りないという、産業界からの要望、批判が強くなった。教養教育についての、こうした大学内外から改革をもとめる流れのなかで教養教育をどのように扱うべきか、京都産業大学全学をあげての検討研究が始まった。

昭和45(1970)年夏、京都産大教学委員会の教科課程専門分科会は1年がかりの討議結果を「中間答申書」にまとめて教養と専門の両課程をくさび型に組み合わせた新しいシステム案を作りあげた。

学生のために

荒木先生の「教育改革に関する中間答申書」についての見解がパンフとして残っている。「『学生のため』を最優先させて、この答申を全学で実現させていこう」。その冒頭で先生は、問題の解決にあたっての大前提を示している。このなかで先生は「現代は専門対象が精密、細分化して来たので、ともすれば、多数の教科目が互いに連絡を取らないまま、無秩序に羅列されている。しかし、あらゆる専門分野の研究成果を幅広く理解することによって、創造的な成果が期待される。これからの人類の進歩はシステム工学、ビッグサイエンス的な学術体系なくしてはありえない。現代が情報化時代といわれるゆえんであり、総合大学が創造的学術研究と人材養成の最高の文教機関としての意義はこの点にある」という認識を示したのである。

そのうえで、教養課程のめざした理想には賛成ではあるが、現状は専門課程と断絶しがちであり、これでは学習意欲旺盛な学生の要望に応えにくい、として教養課程の改革を受け容れたのであった。

本学の開学のあと、わが国の大学は歴史的にみて、大きな転換点を迎えた。20世紀末までの30余年間、日本においては高等教育が世界的にみても異常な普及をみせた。開学のころ学齢人口の高等教育進学率が17%を超え始めたばかりであったが、右肩上がりのカーブを描いて上昇し続けた。平成12年度の進学率が、45%を超すようになった。大学は戦前のようなエリート養成機関、象牙の塔という性格を薄め、だれでもが通うことのできる教育機関になり、国民の再教育という側面を強め



開学当時のカリキュラム一覧

て行くことになった。

大学の大量化につれて、どの大学も倦まずたゆまず変革を続けるのでなければ社会の要請にこたえにくいようになった。本学も例外ではありえない。カリキュラムの再編も、大学の経営も先生にとっては、煩わしいものではなかった。たった一つ『学生のため』という視点を失わなければ、進む道を見分けることができた。それが「建学の精神」の核であった。

入学式のたびに先生はサギタリウスの星座を例にとって、建学の精神を語った。『諸君の学生服

の襟につけたバッジは希望の星座で、大宇宙空間を隈なく自由奔放に翔け廻るギリシャ神サギタリウスの表徴です。諸君はこのバッジにふさわしい大きな夢を抱き、日本古来の道統をバックボーンとする気宇宏大な国際的人物となって、日本国家の独立安定と日本民族の繁栄に献身すると同時に、全世界の平和と全人類の幸福の為に寄与すべく、在学中、健全な身体と健全な精神を作り上げ、堅実な思想と深遠な専門知識と、豪快な実行力と、広汎にして高い水準の教養を体得することに専心努力せられん事を切望します』

4 ビューティフルユニバーシティ

「選択」の道

大学の姿は、文部省の大綱化方針によって、20世紀最後の10年間の後半から、著しく個性化の道を歩みはじめた。大学の運営において、発展の鍵を握る要因として、教員の選択(採用と人事権)と学生選抜(入試)の二つの問題が挙げられる。このうちで入試については、推薦入試、最近はAO入試、あるいは入試科目の削減、一芸一能やボランティアの実績を加味するなど私立大学においては、特に多様な方式が目立って来ている。

ほかの側面からみれば、大学はどのような教員陣と施設・事務システム、そして学生層によって21世紀を生き残るか。展開して行くか。学齢人口の急減に加えて経済の冷え込みがある。大学を取り巻く環境は21世紀の入り口で、いっそう厳しさを増している。ふんだんな選択肢のなかから、最良の方策を大学が自らの責任で選ぶ時代なのである。

ハーマン・カーン博士は学事顧問として来学した約30年前、21世紀は日本の時代であると述べ「教育の普及と質の高さ」「豊かな資本」「新しい産業への強い意欲」「国民の旺盛な貯蓄心」を挙げた。しかしその日本はいま、道徳の退廃が社会を白蟻のように食い荒らす社会になろうとしているかのようである。なぜ、そのような事態を招いたのか。日本という国の立ち直る道はどこに見いだせるか。「21世紀の京都産業大学」は、いかなる方向を選択するべきであろうか。

カーン博士は講演で含蓄の深い言葉を残している。博士によると、実験用のネズミをいくつかの群れに分けてそれぞれの檻に入れる。生理的に快楽を得ることのできる電流を流すボタン。水を出すボタン、餌のボタン、休息を与えてくれるボタ

ンなど、自由に選べるようにしておく。生理的に快楽を呼び起こすボタンに味をしめたネズミは、ひっきりなしに押すようになり、幸せそうに、しかし早死にしてしまう。快楽のボタンを与えられず、しかし、いろいろなボタンをまんべんなく押したネズミの群れは、長生きする結果が得られたという。

「日本は将来、大変に難しい峠を乗り越えなくてはならない、選択の時期にさしかかる」と博士は予言した。本学の学事顧問として「選択の時代」を迎える本学に対して、たくましく乗り切ってほしいという慈愛のこもった助言を送ったのである。

歴史を知る

文学作品を書く。大作を描く。音楽を奏でる。あらゆる文化的な活動には、動機がある。なぜこの作品を仕上げようとしているのか。この作品のモチーフは、どこから生まれたのか。書き、描き、奏でようとする対象は、現実の姿や形として、混沌としている。

そのなかから何かを見つけて、それを抽出して、秩序を与えて作品ができ上がって行く。動機のなかから、作品は産ぶ声を上げる。素敵な芸術作品は、創造者の手を離れて、あたかも独自の生命を宿したかのように、ひとびとの魂の世界を旅して行く。しかし、どれほど時が流れ、どんなに遠くへ旅しようとも、創造者の吹き込んだ生命が、薄らいでしまうものではない。

混沌とした様相のなかから生命の息吹を吹き込まれた作品には創造者の心が脈々として流れて行く。

作品を鑑賞する人は、その創造者の動機、魂の訴えに触れようと試みる。凡庸な作品は、限りな



く多く生み出されるが、いつしか輝きを薄れさせて、消えて行く。鑑賞する魂を揺さぶり、いつまでも色あせない作品は決して多くはない。

わが国の600余りの大学には、いずれも創設の動機や目的があり、いずれもが存立の意義を持っている。だが、創造者の心の輝きを瑞々しく保ち続けるのでなければ、歳を経るにつれて、人々の心を揺さぶらなくなる。存立の意義を失ってしまう。

京都産業大学は、荒木俊馬先生によって創造された。学ぶ人を魅きつけ、社会から高い評価を得て、たくましく成長してきた。幼年少年の時代をすくすくと育ち、いま青年期に入ったこの大学は、精神において荒木先生の創造の動機、理念を堅持している。

建学の精神は、学祖・荒木俊馬先生の全人格の発露である。

その精神に基づく教学の方向性については、荒木先生の学長・総長在任中、13年間の全行動が指し示している。

教学の具体的な展開については、建学の精神を親しく学び体得した教員や教え子たちによって、どの時代においても、そのときどきの状況に合わせて改革され、時代にふさわしい展開を遂げるよう努められた。

そのときどきに批判はあっても、総体として先生の唱えた精神はいつの時代にも先駆性を秘めた大学運営となって現われ、本学の驚異的な発展の原動力になって来た。

美しい心

先生の執筆した「建学の精神」は、京都産業大学の育成しようとする人材の理想像を明確に述べている。『人倫の道』をふみはずすことがない人。『社会的義務』を立派に果たす人。『日本古来の美しい道徳的伝統』を身につけ『自己の信念』を貫く人、としている。深く広い知識と応用能力を蓄える『知育』を^{たひと}にし、ここに掲げた精神面を充実させる『徳育』を^{よこと}緯にして織り上げる人づくり。しかもその機織り場は、日本文化の伝統に色濃く染められた古都・京都でなくてはならない。

『世界のどこを探しても、こんなに美しい都はあるまい』(大正14.6.10 俊馬日記) 世界一、美しい古都で、美しいBeautiful 道徳Moral に彩られた人材を育成して世界へ送り出す。全学部を集中させた一拠点キャンパスには、学生に一体感を持たせること、多角的な研究にふさわしいことなど多くの利点があるにしても、一拠点をしっかりと守り抜く本学の方針も実は、そこに由来している。

四季の花に彩られ、洛北の自然に溶け込んだキャンパスから、日本の歴史を秘めた古都を一望できる。

学ぶのに絶好の環境をもつ、この京都産業大学において、建学の精神に基づいて育てられた理想の人材によって、わが国が支えられて行くのである。

日本の未来を支える。日本の将来を引き受ける。それこそが荒木俊馬先生の願いであった。

